

障害児支援の強化に向けた福祉と特別支援教育における連携に関する調査報告会 議事録

ですね、なれる訳がない。それぞれのポジションでそれぞれの立場でやっていく。その中で、立場における連携も必要で、ツールというのもそういう権力的な自分の立場を認識しておかないと、結局、情報が流れていくという事をちょっと言いたかった訳で、そしてそれぞれのポジションで頑張っってどうしていくか、そしてその中心には我々親も、専門家も代弁をするのですが、基本的には知的障害の分野では、セルフアドボケート、本人が本人を代弁するということですが、最終的には本人自身が主張できる援助をやっていく、ここで6月ですか、国際成年後見法学会というのをこの会場で3日間に渡ってやりました。これは世界から専門家が集まって、素晴らしい内容の議論でした。そこで一番重要視されたのが、どんなに障害が医学的に重い人でも、本人の主張する権利と能力がある、それを支援するのが、我々の役割だと言う事でした。日本の成年後見制度は著しく欠点があるから、法改正が必要だと言う議論になりました。この連携と言う流れも、そこを意識しながらいきたいと思います。今から指定発言をお願いしたいと思います。

【指定発言者：姫田】これからの教育は、先程箕輪先生がお話になりましたように、福祉を考える教育をやらなければならないと思います。また行政においても福祉を考える行政、福祉を考える医療、福祉を考える会社経営、この最後の会社経営というのは非常に大事でございます。例えば、共同作業所というのがございますが、そこで一生懸命、障害者が働いておりますけど、如何せん大変給料が安い、大体1万円くらいです。これでは障害年金を頂いても、生活するということは大変だと思いますので、共同作業所の問題とか、福祉について大変理解のある会社とか、そういう行政・教育も含めて深めて頂ければ、大変有難いと思っています。

【松友】基本的にはあらゆる分野で福祉という視点を持っていこうということで、先生が最後に提案された福祉を考える企業っていうのは、違う意味で今はソーシャルファームというのを提案を盛んにされています、これは、会社経営でもって組織でもって、福祉制度を使わないで、一つの福祉の問題を解決していこうというものです。日本でもいくつか実践がありますが、今ヨーロッパ等では、これは数万という組織が、ソーシャルファームという、日本語に訳すと社会的企業というのですかね。社会的役割を持つ企業という形で提案されているんですね。日本では例えば大地を守る会という、有機農業の仕事が株式会社組織で、しかしそこに基本的な福祉とかですね、環境ということを考えている訳ですね。

ですから、会社そのものは福祉に念頭をおき雇用形態とか社会的貢献とか考えている訳ですね。それを考えて頂きたいという姫田先生の提案、非常に大事な提案ですね。

やっぱり社会全体がですね、それを担えるような、行政的な法的な制度が必要かと思います。

【指定発言者2：小池】私は愛児園と言う児童施設にいました。高校に行かなければ愛児園には入れないことになりました。そのためには高校に行かなければならなかった。でも私の行ける高校はありませんでした。私は養護学校に行くようにすすめられ、そのために5組に行くことになりました。私は急にそれまでクラスメイトだった人たちから白い目で見られるようになりました。養護学校に入ったらもっと白い目で見られると思うどうしても養護学校には行きたくないと言い続けました。そして、PWLに入って仕事をする事になりました。でもどこかで私は高校を卒業していないという気持ちがあり、同じ人間として認められていないような気がして、気分はすぐれませんでした。中学の時も、ついこの間まで一緒だったクラスメイトと分けられてしまった

り、自分だけ普通の高校には行けなかったりしました。だからと言って勉強は付いていけないのはわかっていました。また一人で生きていく勇気はありませんでした。働き始めてからしばらくして、健育ができ



指定発言者2:小池さん

ました。普通高校を卒業することは私の夢でした。高校を卒業でき、自信が持て今度は運転免許を取ることができました。さらにヘルパー2級の資格も取れました。高校を卒業し普通の人と同じになれたとおもいました。色々なことがありましたが、15歳で愛児園からグループホームに入ったことで養護学校には行かなくてもすんだことは良かったと思います。

みなさん今日は、お忙しい中お集まり頂きありがとうございます。小池星子

【松友】小池さんの場合にはPWLというグループホームがあつて、支えられて、本当に今日まで幸せでこれたのですが、私が話を聞きながら思い出したのは、浅草事件です。レッサーパンダの帽子をかぶって女子大生を殺して終身刑になった青年の例ですね。彼は中学校まで普通教育だったんです。そして高校の時に特別支援学校に無理矢理行かされて、そして彼は生徒会長になるくらい優秀だったんだけど、彼が特別支援学校の高等部を卒業した時に、療育手帳とその学校の生徒手帳を破り捨てて、その学校を去って、その後にちゃんとした支援がなくて転々とする中で、だんだんですね、罪を犯してしまった。そのことを裁判の中で弁護士は示しながら、これはきちんとしていかなければならと思った、各新聞社は全てそのことを伏せたんですが、弁護士の方が、本人の承諾を得て、その問題を提起して、結局彼がこうなったのは何なのかと提起した訳です。残念ながら彼は罪を受け入れるということで、終身刑になってしまって、もう少し有期刑にならないかというところだったのですが、それはそれとして、彼の1つの判断ではありますが、やはりそういう風にですね、社会が支援の無い中で生み出してしまった、彼の場合もですね、お父さん自身が支援の必要な方で、唯一家族の中でしっかりとしていた妹さんが末期ガンですね、最後には支援者に看取られなくなったのですが、そういう様々な支援の、複数の支援の必要な状態のある方をですね、総合的に医療・教育・福祉そして職業とですね、支えていかないと結果として、社会から苦しみで落ちこぼれてしまう、それは本人の能力とか責任の問題じゃないということですね、少なくとも支援をやる職業にある人たちは認識して欲しいと言う提案だったと思います。

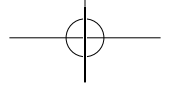
(質疑応答)(意見等)

【質問者(大滝さん)】(箕輪理事長が大瀧さんに付き添い、大瀧さんが直接コメントすると同時に会場にコメント理事長の口からも伝えた)理事長の眼が何か言えっていう眼だったので言います。(笑い)さっきの理事長の言葉は僕はまだ小学校5年だったので覚えてないんです。だけど、毎日生活していく中で、ヘルパーだったり、作業所の職員だったり、駅員だったり、色々な人の言葉をやっぱり感じます。やっぱり大事なのは、本人のどう生きて行きたいかをサポートすること。今日の報告会を聞いて、やっぱり自立支援法を褒めているのは初めてで、だけど大事なことはどういう制度であれ、本人がどうやって生きていきたいかということをサポートするというのが一番大事なんじゃないかと思います。

【松友】非常に本質的なことを二つ言って頂きました。自立支援法という、これは一つの手段ですからね。法律なんて悪けりゃ変えればいいんだし、法律や制度は変えていく。大事なのは本人の自立をどう支援していけるような制度であるかと、大事なのは本人がどう生きて来たんだというキチンとやはり持ち、それをサポートしていくということ。これは自立支援法とは全く名前が違うんですけど、アメリカでの自立生活運動というですねインディペンデントリビングムーブメントという自立生活運動とというのがアメリカから起こって来た時に提起されたのがそうだったので、福祉の分野でも自立という概念が根本的に変わりました。自活ではないと自分で稼いで食べることが自立ではないと、自分がどう生きたいかということを持って、それが可能になる生活が自立生活であると、今大滝さんがおつ



質問者:大滝さん



障害児支援の強化に向けた福祉と特別支援教育における連携に関する調査報告会 議事録

しゃったように、自分がどう生きていくかを確立することができる、自分が主張できる、そういう人間に、そういう人になるように教育することが本当の教育であるという提案でしたね。どうもありがとうございます。

【質問者（障害者支援の従事者、女性）】沖縄から来た一杉理事長さんにお話を伺いたいんですが、すごく就労の働きが実られて、お仕事されている障害者の方がたくさんいらっしゃるという話をうけてすごく感銘をうけたのですが、これからの会社作りというのは、福祉を考えた企業にとってことが大事だと言われたのと凄く合致したのですが、沖縄では障害者に対する、意見交換とか色んな部分で、企業の社長さんとか人事の方とか、そういった部分の接点というのはかなり頻繁に交換会みたいのを設けられているんでしょうか。

【一杉】沖縄もですね経営者は千差万別ですね、特に30人以下の企業が全体の95%くらいで、100人以上の企業は0.6%くらいしかありません。ですから、そういう意味では零細中心の企業体が多いということが言えますが、かえって、東京や横浜と違って経営者と直接顔を合わせることができるんですね。大きな企業だったら、まず支店長にすら会わせてもらえませんよね、それ以外は支店長に会えるなんて絶対にならないと思うんですね、でも沖縄では大体の企業の社長って、すぐに会えるんです。うちの訓練の様子を見て頂けませんかとか、あと、この子の力…もう1年間一生懸命訓練してきた人ですので、ある程度のことでできるので、一回訓練見てもらって、それから採用して下さいというと、ちゃんと受け入れてくれて、ああ大丈夫だと、就職を受け入れてもらったりとか、社長さんとか、人事部長 自ら訓練の風景とか、実習を視察にきて下さるんです、そこで1人でも採用しようかと言って下さるんですね。大都会と違ってフレンドリーで、いちゃりばちよーでーの世界ですね。出会った人は皆兄弟の世界ですかね。あんまり、酷い扱いを受けたというのは、私の21年間の就労支援していますけど、5件くらいしか知らないですね。

だから、平成21年度就労移行支援した中では沖縄県全体で88名いました。今年度は22年度は122名を予定しております。毎年25名づつくらい増えて行くんです。最初の18年度はミラソルから18名、県全体で20名だったんです。つまりミラソルがほとんどを占めていたんです。それはですね、ネットワークを作る中で他の団体も一緒に頑張りましたんです。そしたら毎年毎年25名づつくらい増えて行ってますね。とうとう21年度は88名、ミラソルは22名、ミラソルが一緒になって他の法人とネットワークを作ってきて、押し出して行こうよとなったので、やっと今5年経ってきて形になってきたかな

ミラソルだけではできないですね。地域全体がそういう事業所が増えないとですね、考えだしたのが企業でのグループ就労をコラボレーションして他の福祉法人や医療法人を巻き込みながら、就職させていくような、雰囲気を作っていこうってこの5年間やってきた結果、すごい数の人たちが就職するようになってきたというのがありますね。本当におっしゃる通り、沖縄の経営者ってのは、とても理解のあるというか優しい方が多いと思いますね。

【松友】沖縄って人口が増えているんですね。全国的に人口が減って、東京は人口が増えています、何故沖縄が増えているか、ユイマールというんですか、昔から助けあうという流れがあって昔は日本全体にあったんっすよね、アメリカの占領があったという長い苦労を強いた沖縄に日本の一番良い伝統がのこったのは何なのだろうと私はいつも思う。残すべき日本の伝統や文化をこの震災があったときにふまえて決して障害を支える社会は弱い人や弱くなった人を支え合う社会であって、本来日本の文化に合ったはずでそれがやはりきえていっているというのは、もう一遍ふまえて行く、その中で、経営者、会社という組織もでてる。そうじゃないという利益追求とか責任転嫁とかその最たるもの東京電力は社長が見えないどこに行ったんだと言われていますが、そういう国にはいけないと沖縄からの報告を聞きながら

非常に勇気づけられたと思います。

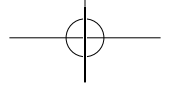
【質問者：（研修中の方、男性）】PWLの 介護基礎研修科で勉強させて頂いています。大滝さんとも授業で何度か講師になって頂いて、この会に出席しまして、感じたのは、自立を支援する活動は見えるが、健常者への障害者教育がされているのかどうか、僕らの時代より今の子供達は少ないのではないかと、教えてください。

【松友】ありがとうございます。ほんとに重要な問題提起ですよ。みんなが、障害のある人を支援しようとして議論しているけど、子供の時から仲間として友達としてその人の存在を知って関わってきて一緒に暮らしている時代があるかという提案で連携という以前の問題、今の問題提起という質問に対して誰かコメント発言していただけないか。

【意見発言者：（障害者支援従事者、教員経験者）】横浜で27年間教員をやった経験があります。その中でも小学校では人権教育というものが入ってきてまして、小学校4年生で、点字についての教科書がでてくる。どこにあるんだろう、切符売り場にあるねとか、点字ブロックがあるねとか、そういった事も勉強する。人権教育という中で、盲導犬にきてもらいふれあいやったり、ベンキョウするけど障害もった方とふれあいは少ない。

【松友】最近も50年前も同じ、障害が重い人はいなかったが、軽度はいました。ある時、障害を持った人が特別支援学校に集められた、私から提案で、同窓会有り、同窓会に呼びかけたが障害のある友達に呼びかけたがこなかった。参加してくれません。小池さんの話もあり感じましたが、教室を分ける必要があったのだろうか、今でも思います。教員は一生懸命やっていたし善意でした。個別支援としてのスキルアップに役だったかもしれない、しかし人間は係わりながらつきあっていく、そのかわりを切っていくことは残念である。重度の人はそういうことが無理でしたが、重度の方も含めて通常の社会の中で暮らしの中でどう一緒に学べるシステムをつくるのかです。インクルーシブエデュケーションシステムの提案であってその為にどうするか方向性と戦略を明確にし、その為にどうお金をつかうかどういう配置にするかどういうプログラムにするかと言う事が、今回の連携も含めて考えられるべきだと思います。基本的には一緒に生きていく、標語ではなく実現にしていける現実的なものにする。質問者の方がいわれていたように小さい時に一緒に生きていないのに、大人になったおじいちゃんになって、おばあちゃんになって一緒に生きて行けといわれても無理ですよ。我々は常に必ず年をとれば障害を持ちます。必ず支援が必要になる。その時に支援して支援されて、そういう人の存在をお互いが知っている、そういうことを前提とした社会にしていこうという意味では、教育のスタートが大事だということです。

【箕輪】横浜の場合、ほとんどの小学校に特別支援学級がありますよね、私たちの時にはなかった所もあった、特別支援学級がある事で教師がどうやって子供達に彼等の存在を伝えて行くかということに学校差があったと私は思う。たまたま小学校中学校の時に私は教育を受けてきていない。受けなくても触れなくても、全く生きてこれた、そのことが、私が中学の教員になったおおもとである。子供たちにちゃんと伝えるという教育が、なんで普通の中学でないんだろうということがあった。中学にいったら彼等の同じ人間としてやればやれる一緒に生きていける人達なんだよと伝えたい思いが基本にあった。その事が徐々に運動としておこっていると思うんですが、存在があるというほとんどの子供たちは横浜はわかってきていますよね、私は存在をしらないで育ってきた部分がある、見て触れる機会が多くなっていることは感じますが、子供達は大人たちが言わないだけで、子供達はとっても素直で、聞けば「そうなんだ」とちゃんと指導すれば、きちんと受け入れられるという気持ちをもってくれるんじゃないかと常々思っていました。高校には障害児教育をする先生が配置されてきています。普通の子達にそういうことを教えることをやる部分が出て来た。



障害児支援の強化に向けた福祉と特別支援教育における連携に関する調査報告会 議事録

その事も解っていかなければならないですが、私たちが何が出来るか、地域でその事を伝える立場と思う。教育の現場では教師がその事を伝える、私たちの立場で彼等の存在を正しく伝えていく事が必要なのかなと思います。

【松友】非常に本質的な議論が少し続きましたが、会場からご意見ありませんでしょうか。

【質問者（高齢者支援従事者）】グループホームに居る前に、ヘルパーサービスステーションでサービス提供責任者、管理者をやっていたのですが、ヘルパーさんの間に、身体障害者のお子さんがいるお仲間が何人かいた、その学校での状況でご質問。おしえていただきたい。1人のお子さんは、足人麻痺があるということで、プールにお母さんに授業にきてくださいということがあって、一緒にプールに入らなければならないので仕事をお休みさせていただきますというはなしがあった。その中の一人の方は息子さんが普通の小学校に行きたいんだけど、中々受け入れてくれなくて、もう就学するために自分の家から通える所であちこち探さなければならないのでお仕事を休みさせていただきますという話があった。やはり近くの小学校では受け入れてくれずに、学校にちゃんと親が迎えに来て、階段の上り下りを全部親がやるんだったら受け入れてもいいですという学校があった。働ける時間が決められてしまってるので、自分の働ける時間でお仕事があったら宜しく願いますということだった。教育の現場で福祉という話が出てきているのですが、特に小学校だと思うが、小学校に入って障害のある方を補佐・フォローしてくれる体制には全然なっていない。この話には、現在の話ではなく4・5年前のはなしなので、5・6年たってどうなるか解らないが、現状はどうかご意見・いいアドバイスをもらいたい。

【松友】するどいい質問。最後にまとめて若干そのことに触れますが、今の質問に対して、なぜ教育の中でそういうアシストが弱いのか箕輪さんどうですか。

【箕輪】時代が違うのでずいぶん変わっているので現在と違うと思うのですが、今の話を聞いてると変わっていない。例えば、修学旅行にはお母さんがついて行かないと連れて行きません、という時代。筋ジストロフィーの子供が、普通中学に行きたいと先が無い、命が限られた子だから地域の中で仲間と過ごさせたいというお母さんの願いがあった。筋ジスのお子さんが私のいた中学に入ってくるときに大変な議論がある中で、普通の生徒は音楽室が4回にあったり、お母さんが4回までおんぶしてくれるならいいですとその時代あった。その話し合いをした結果、その子を地域で受け止めましょうと、私もちゃんと意見を言って、そのかわり皆でどうするか決めましょう。私は特別支援学級の教師。私はその子の体育を担当しますと。体育の時間は今日いつにいなきゃいけない中で、少しでも自分の機能を維持するだけなんです、維持できるような体育を私が3時間プラスしてやります。だからみんなも受け止めましょうと職員会議で決めました。結果的には教室移動をおかあさんにやってもらうことはそのときにそうだった。ほんとに小学校からずっとやり続けていた。彼は近くの県立高校に入り、高校2年生で亡くなった。そのときに思った事は、特別支援学校に行った筋ジスの子と普通高に行った筋ジスの子のお葬式を両方見た。その時に思ったのは特別支援学校の筋ジスの子は、本当に仲間すら来なかった。お葬式に来れない。子供が車いすで移動するのは大変。ただ、地域で生きた子は仲間たちが皆お葬式に参加した。泉高校の生徒だった。仲間たちが口々に「あいつ小学校3年の時まで一緒ににはしってたんだよな」と言っていた。そこで私は、障害を持った子が地域で生きることの意味をそこでほんとに大きく感じた。どれだけの生き方をその子の人生がどれだけの人を彼等がほんとに一生懸命生きていると分かってくれたのかということが、私はそれが子供の生き方、こどもの人生なんじゃないかなと思います2人の生き方が印象に残っている。

【質問者：（障害者支援従事者、教員経験あり）】現在は生活介護の支援員をやっていますが、最後に努めた中学校では耳が聞こえない方が2人いました。社会科の授業の時にボランティアを申請してくれと福祉団体と協議して来てくれる。副校長が回数は不十分ではないが申請してくれる。かなり手だてを講

じてくれるということがある。その前の前の学校では、足の不自由なお子さんが中学に入ってくる。校長裁量でエレベータを作った。十分ではないにしても。説明して協議していけば、管理職の姿勢も変わる。福祉の世界と教育の世界の大きな違いは、教育の世界は、教師と生徒が交互に影響を与えあっている、共に成長しようと基本的にある。福祉の世界は、こちら側がサービスをする人、受ける人がどうなることではない。共に成長し変化し高め合っていくという発想が無いと、いろんな制度的な問題がもっと柔らかくならない。そういうことを凄く感じて、お互いにケアし合ってお互いに隠れてて気がつかなかった能力を発見し合うことがほんとに大事で、だからインクルージョンと言うお互いやってくことなのだろうなと感じた。

【松友】最後に重要な話になった。

先程の話に戻り、学校、施設単位でケースを解決するということではなく、そのためにいろんな人のいろんな社会資源を利用すればいいと思う。スクールソーシャルワーカーというのがありますが、神奈川県は正式に一人も配置していません。今も世界はほとんど常識で、そんなソーシャルなさまざまな問題を先生方がしょって、苦勞されてその結果が結果として改善につながってない。ですから、私たちは弱い時には助けてくれ、連携しよう一緒にやろうということで、大きな力になれると思う。だいたい日本の教師は、私は両親が教師で親戚中教師ばかりで非常にまじめです。その結果としてつぶれていきますよね。その為には、大きないろんな仕事があって、いろんな分野をいろんな人を巻き込んで行く連携して行く。例えば、ADAという法律で持って、エレベータがないという所は全部法律違反になる。これは、リーズナルアカブネーションという合理的配慮という概念の中で差別と言う概念をもって逮捕される。日本には、差別禁止法がありません。その結果結局現場の努力という事だけで、やられている。その社会全体を変えて行くという中で、いろんな職種いろんな分野いろんな回線、特に連携は国土交通省における住宅問題、いわゆるバリアフリー化の問題、学校のバリアフリー化が出来ていないのはなんなんのか、いわゆるそうこの中で、教師と親教師と生徒などの対立概念とか3社の図式ではなく、地域全体の社会全体の中でやはり学校の場を支えて行くというほうに先生たちのシグナルも欲しいし、われわれも社会にアピールをし、そういう形の中でさっき質問されたような形の問題も整理して行く。

今日提案しました、連携というのはさまざまな社会資源さまざまな力、海外の人にかつて言った時に、こう言われました。学校のバリアフリーさえも出来ない日本ですから私たちはその結果、社会が豊かになり、弱い人を中心にある社会が本当に強い社会だという認識が多くの国で出来ている。ほんとに弱い人を中心にしなが強い国を作る、その中に障害・お年寄りと言われている人達の存在の私たちにとっての有りがたい意味があると言う形の中で、連携を捉えて行かなければならない。

そこで働く責任を持つ人達がしょいこむのではなく、国民全体の私たち一人一人の責任関わりとして言って行かないと国は変わらないと思う。私たちはいったいどういう国づくりのために生きて来たということとともに、まだこれから本当の意味での素晴らしい美しい強い日本を作るという意味ではいわゆる本当に弱い人たちが守られる社会が強い社会だと、そしてお互いの弱さを吐き出しながら連携して強くなって行くと最終的に確認しながら、この研究報告集会シンポジウムを終わりにしたいと思います。本当に今日はお忙しい中、たくさんの人にお集まりいただきましてありがとうございます。これから一緒にまた進めて行きたいと思います。本当にありがとうございます。これで終わりにします。

【岩間】はい、ありがとうございます。それではこれもちまして、事業の報告会を終わりにしたいと思います。



特定非営利活動法人 PWL

組織・活動概要

知的障がい者の夢や希望の実現に向けて

PWL は軽度な知的障がい者の自立支援をしている横浜のNPO法人です。



設立以来18年、P(=Play:遊ぶ)、W(=Work:働く)、L(=Learn&Life:学ぶと暮らす)をテーマに職業訓練や社会適合のためのグループホームやケアホーム、作業所などを運営し、様々な文化活動やスポーツ活動への参加など、ひとりでも多くの知的障害を持った人たちが活き活きと生活していくための、積極的な活動を進めてきました。

URL:<http://pwl-yokohama.com>

組織概要

- 法人名: 特定非営利活動法人PWL
- 設立日: 2003年(平成15年)12月25日
(1992年より活動スタート)
- 所在地:【本部】
〒231-0824 横浜市中区本牧三之谷9番12号ヒント102号室
TEL:045-624-2642 FAX:045-624-2643
お問い合わせ:info@pwl.jp
URL:<http://pwl-yokohama.com>
- 代表者: 箕輪一美(Minowa Hitomi)
- 主要事業拠点
 - ☐グループホーム/ケアホーム13ヶ所
(統括運営センター:本牧本部)
 - ☐PWL就労移行センター【指定障害者福祉サービス事業】
 - ☐PWL就労移行センター【就労移行支援】
 - ☐健育自立センター【自立訓練(生活訓練)】
 - ☐ワークステーションPWL【就労継続支援A型】
 - ☐ライフサポートステーションPWL【生活介護】
 - ☐ワークランドPWL【地域活動支援センター作業所型】
 - ☐KENIKU KIDS(YAMATE KIDS)【児童デイサービス】
- 協力機関
 - ☐PWLスポーツ文化振興協会
 - ☐日本知的障害者卓球連盟
 - ☐日本健育高等学院(サポート校)
 - ☐有限会社MO(みんなのおしごと)企画

検討委員会委員名簿

障害児支援の強化に向けた福祉と特別支援教育における連携に関する調査事業

所属	役職	氏名
委員長		
有) エムオー企画	取締役社長(一級建築士)	小野寺 右耕
委員		
特定非営利活動法人PWL	理事長	箕輪 一美
横浜市中学校特別支援教育研究会	初代会長	姫田 長次郎
社会福祉法人柴野の会かりいほ	施設長	石川 恒
高月病院	精神科医	宮崎 伸一
特定非営利活動法人 ミラソル会	理事長	一杉 光男
特定非営利活動法人夢の樹オホーツク	常務理事	平賀 貴幸
料理研究家		加藤 和子
社会福祉士事務所早稲田スパイク	社会福祉士	松友 了
顧問		
田園調布学園大学	講師	富永 健太郎
早稲田大学	大学院教授	浦川 道太郎
オブザーバー		
厚生労働省 社会・援護局 障害保健福祉部障害福祉課	障害児支援専門官	光真坊 浩史



厚生労働省 平成 22 年度障害者総合福祉推進事業
障害児支援の強化に向けた福祉と特別支援教育における連携に関する調査報告書

2011 年 3 月 31 日発行
編集人 箕輪一美
発行所 特別非営利活動法人 PWL
〒 231-0824 神奈川県横浜市中区本牧三之谷 9-12 ヒント 102
TEL.045-624-2642
URL:<http://www.pwl-yokohama.com>
E-mail:info@pwl.jp
編集 特別非営利活動法人 PWL 事務局
編集協力 株式会社ダン
表紙・絵 森雅之
協力 仙台市 新潟県 横浜市 神奈川県 兵庫県
印刷・製本 東京リスマチック株式会社